国立国語研究所学術情報リポジトリ

対人コミュニケーションの言語問題

著者	宇佐美 まゆみ
雑誌名	多言語・多文化共生社会における言語問題
ページ	63-75
発行年	2002-07-31
シリーズ	国立国語研究所国際シンポジウム ; 第9回 第1部会
URL	http://doi.org/10.15084/00003588

発表 4

対人コミュニケーションの言語問題

Language Problems in Interpersonal Communication

宇佐美　まゆみ
東京外国語大学
usamima@tufs. ac. jp

1．はじめに

多言語・多文化共生社会においては，言語使用に起因する対人コミュニケーションの問題が，ますます多様化することが予想される。これら起こり得る言語・社会問題を予測し，適切に対処していくためには，言語，及び，言語使用にかかわる問題を社会問題として捉える視点とともに，個人間コミュニケーションにおける個々の問題は，社会問題へと通じていくものであるということの重要性を認識することが大切である。

本稿では，まず，社会環境・構造の変化と日本語コミュニケーション，人間の意思との関係を簡単に概観した後，日本語による対人コミュニケーションにおける言語現象のひとつとして，主に，「高齢者に対するコミュニケーション」の問題点を概観する。そのことによって，対人コミュニケーションのあり方が，これからの多言語・多文化共生社会に向けてどのように変容していく必要があるのかを考える[1]。

口頭発表では，さらに，フォリナートークや，異文化間ミス・コミュニケーションなどの現象にも触れながら，これらの現象に共通する問題を，「対人コミュニケーションの言語問題」という観点から考察する。また，これら対人コミュニケーション上の問題を，「ポライトネスの談話理論構想」（宇佐美，2001b）における「フェイス侵害度の見積もりのギャップ」や「マイナス・ポライトネス」という概念を用いながら，分析・考察する。

---

[1] 本稿は，筆者が以前書き表した内容も含めながら，新たに「対人コミュニケーションの言語問題」という観点から改めて考察したものである。そのため，一部既に出版されている内容と重なる記述もあることをお断りしておく。

2．社会環境・構造の変化と日本語コミュニケーション

21世紀の日本語コミュニケーションにかかわる3つのキーワードとも言える言葉に，「情報化」「少子化」「高齢化」がある（宇佐美，2001a)。「情報化」は，チャットなどの新しいコミュニケーション方法と，それに応じた新しい言語使用の型を生みつつあるとともに，既に，対面コミュニケーションと比べて，対人配慮の少ない攻撃的言語行動が多く見られるというような問題を生み出している。「少子化」は，幼少期における同世代間の対面コミュニケーションの減少をも意味し，そもそも人と交わる際に必要な対人コミュニケーション・スキルの習得に影響を与えることが懸念されている。また，「高齢化」は，世代間コミュニケーション・ギャップにかかわる問題を増大させる可能性もある。さらに，もう一つのキーワードに，今や手垢にまみれてしまった「国際化」という言葉があるが，この言葉は，新しい視点も加えて言い換えると，「多文化共生への視点」になると言える。つまり，外に目を向けて異なる文化・社会と交流すると同時に，国内への異文化の流入，国内における価値観の多様化も認めた上で共生をめざすという姿勢と社会環境創りという視点である。しかし，こういう視点があったとしても，変化の過渡期には，異文化接触に関わる諸問題が生じるとともに，それに応じてコミュニケーションのあり方も変化を余儀なくされることが予想される。このように，現在進行中の社会環境・社会構造の変化が，「対人コミュニケーション」のあり方に大きな影響を与えることは必至である。

3．現代日本人の意思と日本語コミュニケーションの変化

しかし，ここで強調したいことは，これからの社会環境・社会構造の変化が，いかに日本語や対人コミュニケーションに影響を与えるかということよりも，むしろ，それとは逆方向の変化を生み出す可能性のほうにしっかりと目を向ける必要があるということである。すなわち，「多言語・多文化社会における日本語コミュニケーション」を考える際には，それが「どうなっていくのか」という傍観者的な視点ではなく，それを「どうしたいのか」という「意思」を重視する視点のほうが重要であると考えるからである。つまり，価値観の変化が言語と言語使用に変化をもたらし，それが対人コミュニケーション，人間関係のあり方にも変化を引き起こし，ひいては，社会のあり方にも影響を与えることができるという視点である。

言葉や対人コミュニケーションのあり方についてのビジョンに関わる視点の重要なものに，「人権」，「多文化共生」，「平等意識」がある。21世紀の多文化共生社会における日本語コミュニケーションに，まず求められるのは，「人権に配慮した言動」であ

り，自らの言動は「アカウンタビリティ（説明責任）」を負うということをしっかり自覚して言葉を発するということである。また，「多文化共生」を心地よく実現させるためには，異なる価値観を尊重しあうということを前提とした「平等意識」を，「言葉にも反映させる」ことが必須である。

本稿では，このような視点を踏まえた上で，日本人同士の「高齢者に対するコミュニケーション」を取り上げ，その現象と問題点を概観する。

4．高齢者自身の能力と高齢者を取り巻く周りのコミュニケーション環境

まず，高齢者のコミュニケーション能力について考えてみると，医学的・生物学的には，「コミュニケーションに関与する脳の機能」や「言語能力」と年齢との関係など，主に「身体機能」が加齢とともにどうなっていくかという観点からの研究がなされているが，興味深い点は，「年をとったからといって，日常の生活に支障をきたすほど，コミュニケーション能力が衰えるわけではない」ということが報告されている点である（辰巳，1997）。言葉を喚起する能力は，加齢に伴い衰えても，黙読能力は若年者とほとんど変わらず，語彙数にいたっては，加齢に伴って増大するという報告もある（伏見，1997）。

客観的な研究の結果は，意外にも，世間で「もう年だから…」などと一般的に思われているほど，悲観的なものではないことを示している。また，そういった「能力」には個人差が大きく，単に「高齢者」としてひとまとめにすることはできないということもある。また，「健康な老化」と「病的な老化」は，区別して考えられる必要がある。

日本人の平均寿命は伸び，現代の高齢者は，認知能力，体力ともに，以前と比べて格段に充実していると言える。そういう変化にもかかわらず，今日の社会にも，未だに，お年寄りは，「弱いもの」というような高齢者に対する否定的なイメージや思い込みが根強く残っている面があり，そういった否定的な思い込みが，周りの人たちの高齢者に対する言葉遣いや話し方，態度，しぐさなどに，如実に反映されている面がある。しかし，周りが高齢者をいわゆる「年寄り扱い」したり，それを表すような言葉遣いをしていると，高齢者自身も，肉体的には元気であるにもかかわらず，精神的に，いわゆる「老け込む」のが早まってしまうというような研究結果が最近では出てきている。

本稿では，高齢者の「精神面」，つまり「気持ちの持ち方」に影響を及ぼす「社会的側面」，特に「言葉遣い」に焦点をあてて，「高齢者とのコミュニケーション」にかかわる問題を考える。つまり，高齢者自身のコミュニケーション能力というよりは，むしろ，「高齢者を取り巻く周りのコミュニケーション環境」に焦点をあてて，「高齢者

に対するコミュニケーション」を考える。なぜならば，そういった周りの環境というものが，高齢者自身のコミュニケーションの仕方，ひいては，高齢者の「生き方」にも影響を与えるのだということがポイントで，それは，結局は，高齢者自身の問題でもあるからである。

5．旧来の社会的価値観を反映している「言葉」を再考する

「年寄り扱い」「老け込む」など，高齢者にかかわる「言葉」を考えてみると，これらの言葉に埋め込まれた，ニュアンス，意味合い自体が，従来の社会の「高齢者」に対する扱い方や「年をとること」に対する否定的なイメージを反映していることに気づく。例えば，「老人」という言葉の受け止め方には，もちろん個人差があるが，最近では，「私は「老人」ではないと思っている「高齢者」の方」も多い。にもかかわらず，例えば，ある辞書の1981年の版には，「老人」という言葉の説明が，次のように書かれていた。「人生の盛りを過ぎ，精神的にも肉体的にもかつてのたくましさのなくなった人」

「人生の盛り」とは，一体，いつなのか。最近では，「今が人生の盛り」だと思っている「高齢者」の方々も増えてきている。このような価値観，人生観の変化を反映して，さきほどのような辞書の記述には，さすがに，いろいろなところから問題視する声が上がり，最近の辞書（大辞林等）では，「老人」という言葉は，「年をとった人，（年寄り）老人福祉法では65歳以上を言う」などの，より客観的な記述に変わってきている。また一方では，否定的なイメージをどうしてもひきずってしまう「老人」という言葉を避け，より中立的な「高齢者」という言葉が使われるようになりつつある。

この「老人」という言葉の「辞書における説明の仕方」に顕著に反映されているように，普段，なにげなく使っている「言葉」とその「使い方」には，良くも悪くも「古い価値観」というものが埋め込まれており，それらを，少し意識して考えてみると，意外にそういう「言葉」が，実際の考え方や行動にまで及ぼしている影響がいかに大きいかということに気づかされる。このような体験から，「言葉の力」の大きさを自覚することの重要性も自覚されるようになる。

6．高齢者を取り巻くコミュニケーション環境の具体例

「高齢者を取り巻くコミュニケーション環境」とは，「高齢者以外の大人たちの，高齢者に対する言葉遣い，話し方，態度，しぐさなどの，言語的・非言語的行動と，それらを生み出す社会的環境」のことを指す。具体的には，①高齢者を見ると，なんとなく耳が遠いのではないかと勝手に思いこみ，必要もない人にまで大きな声で話す，

②家族以外の者が，あまり親しくない高齢者を名前ではなく「おばあちゃん」「おじいちゃん」と呼び，高齢者を名前で呼ばない，③特に家族などが，「また～したの！」「早く～しなさいよ！」と命令口調で話すなど，全体的に，高齢者に対しては，「子どもに対するような話し方」がなされている，④言語面だけでなく，ちょっとしたことを大袈裟に誉めたり，少し馴れ馴れしく体に触れるというように，高齢者に対する「態度」にも，子どもに対するものと共通したところが多い，⑤「年甲斐もなく…」だとか「年寄りらしく…しなさい」であるとか，果ては，「年寄りのくせに（出すぎたことをするな）…」など，日本語には，「～らしく」といって，昔ながらの役割の枠の中に閉じ込めようとする力を持つ言葉や，「～のくせに」といって，その枠から飛び出すことを押さえつけようとするような価値観を反映した，ある意味で，昔ながらの価値観や枠の中に閉じ込めておくのに便利な言葉が数多くある。

こうした言葉や現象を直接的，間接的に耳にしたり，体験するような「コミュニケーション環境」にあっては，本当は，元気で，まだまだ社会に貢献できる高齢者の方々の意欲もそがれてしまうと言える。

②にあげた現象については，「おばあちゃん」という呼びかけは，「親しみ」を表しているのだから別にいいではないか」というような反論もある。確かに，「おばあちゃん，おじいちゃん」という呼びかけには，「親しみ」がこもっているように感じられるが，「言葉の使い方」をもう少し分析的に見てみると，「おばあちゃん，おじいちゃん」という呼びかけは，どうしても「上から下への親しみ」であることが分かる。このことは，「おばあちゃん」「おじいちゃん」という呼びかけが，高齢の知識人や有名人に対しては用いられないということからも明らかである。つまり，そこには，高齢者を対等な一人の人間とみなしていない，少し下に見ているという気持ちが無意識にせよ反映されていることは否めない。また，投書などで，「名前で呼んでほしい」と訴えている高齢者に対して，「おばあちゃん」は「親しみ」を表しているのだから別にいいではないかといって反論する人もいるが，そのこと自体が，既に「当の高齢者自身がそれをどう受け止めているかという高齢者の気持ち」を無視した一方的な捉え方だということができる。本人の気持ちを無視して，それを勝手に「親しみ」だと言うのでは，「親しみ」の押し売りになってしまうからだ。

③にあげた，子供に対するような話し方の一つともいえる，名前を呼ばないで，「はい，おじいちゃん，お注射しましょうね」というような言い方も，病院や介護施設などでよく見られる。人の「名前」というものは，その人のアイデンティティ，つまり人格も含めた「その人の存在」を示すものであるから，他人から自分の名前を呼ばれないということによって，「人権を損なわれた」と感じる高齢者がいても，決してオーバーなわけではない。「人は，自分が呼ばれたいように呼ばれる権利がある」というのは，人権問題の基本である。⑤の，旧来からの枠の中に閉じ込めるような表現という

のは，まさに，対人コミュニケーションにおける言語問題を構成するものである。

7．保護するようなコミュニケーション（第二の赤ちゃん言葉）

「名前で呼んでほしい」「老人」と呼ばれたくないというような主張は，既に80年頃から，新聞の投書などで取り上げられていたが，投書などにおける主張は，一個人の意見として聞き流されることが多く，「はい，おじいちゃん，お注射しましょうね」というような高齢者に対する話し方が，ある意味で「象徴的」に表している「高齢者を取り巻くコミュニケーション環境」の問題を「社会問題」として捉え考えようとする動きは，20年近くたった今でも，残念ながら，日本では，まだあまりないと言えよう。

しかし，こういった「高齢者に対する言葉遣い」の問題は，何も日本だけに見られることではなく，むしろ，まず，欧米でその存在が意識され，問題視されるようになった。アメリカなどでは，「高齢者に対するコミュニケーション行動」の代表的なものとして，「高齢者を子ども扱いするような話し方」があることから，既に，それに対して“secondary baby talk（第二のベビートーク（第二の子供に対する話し方）”，「エルダースピーチ（高齢者言葉）」などという「名称」までついているほどで，こういったコミュニケーションは，「高齢者の尊厳を損なうものである」として社会的に問題視されるようになり，70年代頃から研究が盛んになっている。

さらに90年代に入ってからは，話し手の意識としては，むしろ親切心から，大きな声で話したり，ゆっくり話したりしているという場合もあることや，話し方だけではなく，しぐさ，態度なども含めて，“patronizing communication「保護するようなコミュニケーション」”と呼ばれるようになり，社会的な問題意識に基づいた批判的な観点からの研究が，益々盛んになりつつある。

「保護するようなコミュニケーション（patronizing communication）」とは，「高齢者を無力で依存的であると捉える，根拠のない思い込みのために，高齢者とのコミュニケーションにおいて生じる過剰な調節，すなわち，不必要に修正した行動を取ること」であると定義されている（Ryan et al. 1995）。「保護するようなコミュニケーション」の心理言語学的特徴をあげると，「語彙的」には，単純な語彙を使う，子供っぽい単語を使うというようなこと，また「文法面」では，単純な文やその繰り返しが多い，命令形や断片的な文が多いというようなことが報告されている。さきほどの，おじいちゃん，おばあちゃんというような「呼称」にかかわるもの，英語では，sweetie, honeyなどの「親愛語」，子供に対するような呼びかけとしては，英語では，good girl, naughty boy，日本語にすると，「いい子ちゃん」「悪いぼうや，やんちゃぼうず」といったようなものまである。

8．高齢者のコミュニケーション環境を脅かす「保護するようなコミュニケーション」

高齢者に対する「保護するようなコミュニケーション」に関する研究がアメリカで盛んになった背景には，80年代頃から「世代間コミュニケーション」の研究の必要性が認識されるようになったということがある。世代間コミュニケーションの研究や調査をしているうちに，例えば，若者も高齢者も，「若者よりも高齢者のコミュニケーション能力が劣っている」と認識しているという結果や，若者も高齢者も，お互いに「相手の世代は自分たちとは異なるコミュニケーション行動」を取ると捉えており，そのために，「世代間コミュニケーション」を満足できないものであると考えているということなどが明らかになってきたのである。

しかし，実際は，一般に思われているほど，「高齢者のコミュニケーション能力は低くない」ということに注目した研究者たちは，さまざまな調査・研究を行い，「高齢者のコミュニケーション能力に対する否定的なイメージや評価」が，「根拠のない思い込み」に基づいていることが多いということを次第に明らかにしていった。つまり，高齢者にはゆっくり話してあげなくてはというような，なんとなく一般に信じられていることは，明確な根拠に基づくものではなく，むしろ勝手な思い込みであることが多いこと，そして，その思い込みによって生じる「保護するようなコミュニケーション」によって，かえって，「高齢者のコミュニケーション環境が脅かされている」と結論づけたのである。

また，そういう一方的な思い込みの強い人に限って，高齢者個人個人の本当のニーズ（例えば，耳が遠いので少し大きな声で話してほしい等）に対しては，必要な調節，ケアをしないということも指摘されている。つまり，自分勝手に「保護するようなコミュニケーション」をする人ほど，高齢者自身の意思やニーズを尊重していないという結果が出ている。

9．「保護するようなコミュニケーション」が引き起こす悪循環

それでは，次に，こういう「保護するようなコミュニケーション」行動をそのままにしておくとどういうことになってしまうかということを示したモデルを簡単に紹介する。

そのために，以下の図1に，「保護するようなコミュニケーション」の特徴を簡単にまとめるとともに，「保護するようなコミュニケーション」が，若い世代と高齢者の間の世代間コミュニケーションにおいて，いかに機能するかということを示した「高齢

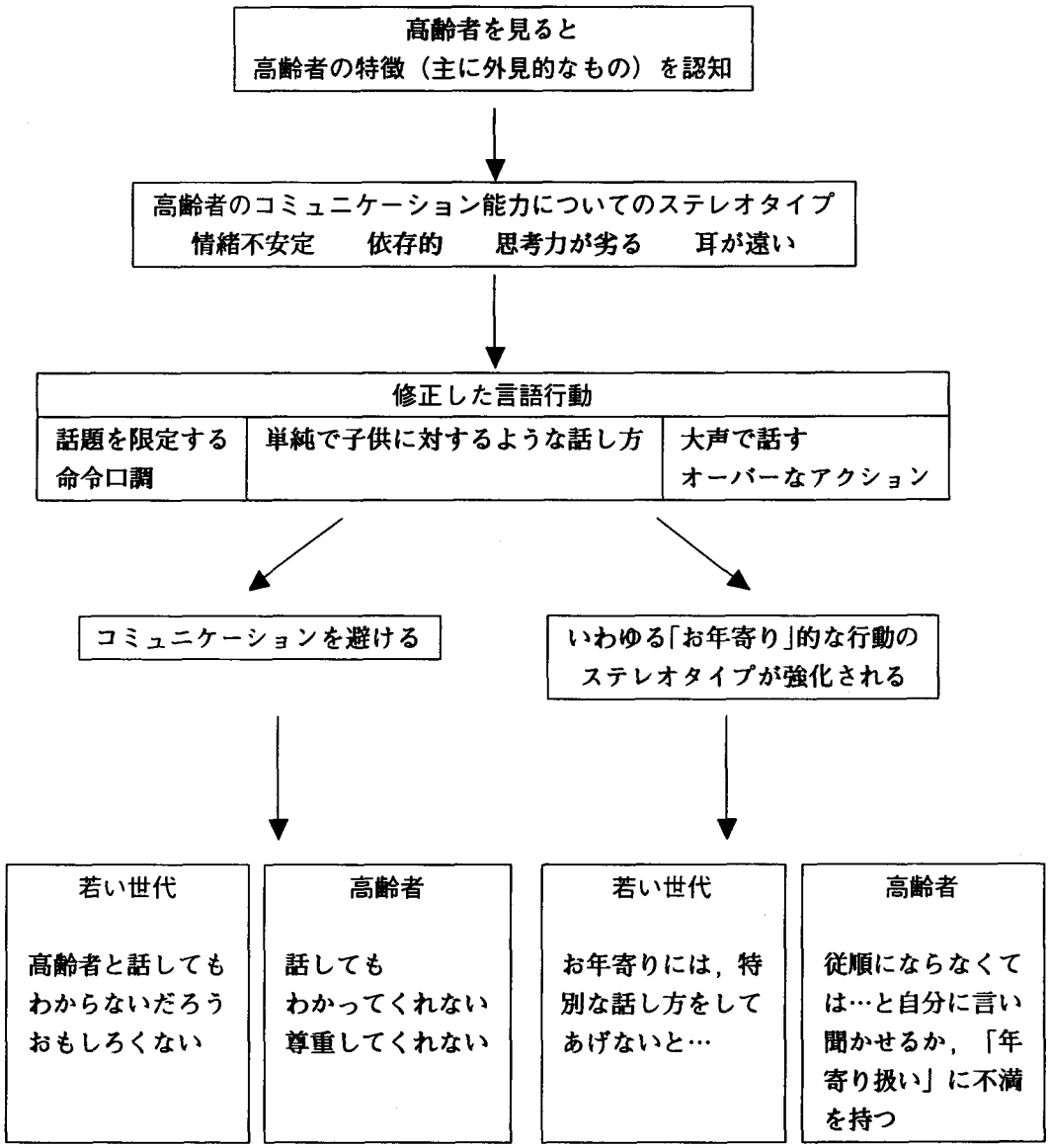

図1　「高齢化に伴うコミュニケーション環境問題のモデル」における「保護するようなコミュニケーション」の特徴と機能
（Ryan et al.［1995］より。筆者訳）

化に伴うコミュニケーション環境問題のモデル」（Ryan et al. 1995）を図示し，後に説明する。

図1に示したように，「高齢化に伴うコミュニケーション環境問題のモデル」によると，人は，まず，高齢者に出会うと，高齢者の外見的な特徴が引き金となって，高齢者のコミュニケーション能力についての思いこみによるイメージを浮かべる。図にあ

るように，それは，情緒不安定だったり，依存的，思考力が劣る，耳が遠いというような思い込みである。その思い込みの結果，「修正された言語行動」，つまり，命令口調で話したり，子供に対するように話したり，大声で話したりするというような，普通の大人に話すのとは違った言語行動としての「保護するようなコミュニケーション」が引き起こされるというわけである。

このように誤った先入観に基づいた，「修正した言語行動としての保護するようなコミュニケーション」を，若い世代が何の疑問も持たずに続けていき，また，高齢者のほうも，善意でしてくれているのだから…といって，例えば，「そんなに簡単な単語を使わなくてもわかりますよ」というようなことを説明しないで，黙って受け入れていると，次のような好ましくない状況が生じる悪循環につながっていく。

まず，コミュニケーションの機会が少ない場合には，若い世代は，「保護するようなコミュニケーション」が必要だと勝手に思い込み，そのために，ゆっくり話したりするのがめんどうだと思ったり，高齢者に話してもわからないだろうと思い込み，高齢者とのコミュニケーションを避けるようになる。また，高齢者のほうも，「保護するようなコミュニケーション」のために，子供扱いされているようでいやだと感じたり，尊重してくれない，わかってくれないと感じて，結局は，お互いにコミュニケーションを避けるようになってしまうということを導いてしまう可能性がある。

また，もうひとつの可能性，主に家族や親戚関係などの関係があり，比較的コミュニケーションする機会が多い場合，「保護するようなコミュニケーション」を内心は不愉快に思っていながらも，従っていたほうが無難だと黙って受け入れていると，若い世代は，「高齢者に対しては，やはり修正した，子供に対するような言葉を使ってあげたほうがいいのだ」という思い込みをますます強めてしまうことになる。一方，高齢者のほうは，ただ波風をさけたいがために，依存的でおとなしく，協調的にして，「保護される役割」を「自ら演じる」ようになってしまうか，逆に，子供扱いされることを逆手にとって，あえて，その扱われ方にあわせるように，「不平を言ったり，だだをこねる」という，「高齢者の否定的なイメージ」に，自ら合わせるような行動をしてしまうということになってしまう。

つまり，周りの「保護するようなコミュニケーション」は，まだ，認知能力も体力も健全な高齢者にまで，いわゆる「保護される，いたわられる対象」としての「お年寄り」的な行動を，知らず知らずのうちに身につけさせてしまうという危険性さえ含んでいるというわけである。

日本では，「年寄りは年寄りらしく」とか，「好かれるお年寄りになりなさい」などとよく言われますが，その裏には「黙って言うことを聞いていれば，かわいがって保護してあげるのに」という一種の恩着せがましさが感じられる。そればかりか，このような発想は高齢者の自己主張権を剥奪し，暗に従属を強いることにもつながってお

り，高齢者の人権を無視するものであると捉えることもできる。

このように，「保護するようなコミュニケーション」が欧米で非常に問題視されているのは，それが，「基本的に，高齢者の自尊心，幸福，そして心理状態に対して，潜在的に否定的な影響をもたらす可能性を含んでいる」と考えられているからである。「保護するようなコミュニケーション」というと，聞こえはよいが，これまでの研究結果から，それは，「本質的に，高齢者の人格の尊重を欠き，人間性が軽視されるような環境の中から生まれてくる」ということが明らかになってきているのである。つまり，見過ごしてはならないのは，同情的だったり，保護してあげるというような，一見善意に基づくように見えるコミュニケーションも，受け手である高齢者自身の気持ちやニーズを無視したものであるならば，かえって高齢者の自尊心を傷つけることになってしまうということを，他の世代は，また，社会全体が，もっと自覚する必要がある。「保護するようなコミュニケーション」と翻訳したが，実は，「保護するような」の，英語，patronizing には，「恩着せ顔の，横柄な」という意味もあるというのは，興味深い。

10. 高齢者を取り巻くコミュニケーション環境を改善するためにできること

世代間コミュニケーションをより円滑に進めるため，また高齢者の人権を守るために，こういった「高齢者を取り巻くコミュニケーション環境」を改善していくためには，どのようなことができるのだろうか。

10.1．世代間コミュニケーションを積極的に行う

まずは，より若い世代が，「老化」や「高齢者」について抱いている誤った先入観や思い込みを正し，正確な知識を身につける必要がある。また，それと同時に，「保護するようなコミュニケーション」は，「過剰な」調節であり，高齢者の自尊心を傷つけるものでもあるということをしっかり認識した上で，「高齢者を尊重すること」と，「必要に応じてケアする」こととの適切なバランスをはかることが最も重要である。つまり，話し手の側は，勝手な思い込みに基づいて「修正した行動」をするのではなく，高齢者自身に，大きい声で話す必要があるかどうかを確認した上で，必要性に応じた適切なケアをすることが望ましいと言える。また，高齢者自身のほうは，「無力で保護される対象」としての「好かれるお年寄り」を演じるのではなく，どういう点でケアが必要で，どういう点では必要ないのかなどについて，しっかりと「自己主張」していくことが望まれる。そのためには，「高齢者が声をあげやすい環境」を作っていくことが必要になってくる。

10.2．生き生きした高齢者をアピールする

本稿では，あくまで，「言葉」「コミュニケーション」にかかわることに焦点をあてるが，「老人」という言葉に，どこか，暗い，わびしいイメージがつきまとうのは，老人という言葉が，これまで，「寝たきり老人」「一人暮しの侘しい老人」といったような暗い「文脈」で使われることが多かったことにもよる。そのようなイメージを払拭するために，「高齢者」と言いかえるのも，ひとつの方法かもしれないし，また，メディア，広告などの影響力が大きい現代においては，「元気な高齢者」のイメージが，メディア，広告などで広く扱われるようになると，「高齢者」とってよい周りの環境ができることにつながるかもしれない。

というのは，そういったメディアに描かれる高齢者のイメージによって，「周りの人」の「あー，最近の高齢者は，山登りをしたり，インターネットをしたり，スケッチをしたりして，人生を楽しんでいる人も増えているのだなー」といったことを意識する機会が増え，これまでの「老人」と結びついていた「弱いもの」，「社会とかかわりのない人」などのイメージから，作られていた感のある「勝手な思い込み」を修正するのに役立つかもしれない。また，当の高齢者にとっては，もともと元気だった人は，ますます勇気づけられるだろうし，周りからの，「年甲斐もなく…」「もう年なんだから…」という目に見えないプレッシャーや「年寄り扱い」に，自分を抑えていた人にも，希望を与えることができるのではないか。つまり，「活動的な高齢者というようなよいイメージ」というものは，仮にイメージのほうが先行していたにしても，そのよいイメージに「現実の自分を近づけよう」という新たな動機，目標，生きがいを生み出す力を持っている。そして，そういう動機や生きがいが生まれることによって，さらに，現実に，「積極的で，活動的な高齢者が増えていく」という「良」循環を作り出すことさえできるからである。

世代間交流の場を広げることも有用だろう。アメリカなどでは，「世代間コミュニケーション」を早いうちから経験しておくことが大切であるという認識から，高齢者の方々が，ボランティアのような形で，地域の小・中学校等に定期的に出向し，今の子供たちが知らないようなこと，体験できなかったようなことなどを話す機会を設けるというような試みが，各地で広がっている。子供たちの反応も非常によいようだ。それは，幸いにも，子供たちには，まだ，「誤った先入観や思い込み」ができあがっていないからかもしれない。

10.3．高齢者の個人差を考える

21世紀の高齢社会に突入し，社会制度のあり方やエイジングの問題などが様々なところで取り上げられるようになってきた。不況が長引く社会情勢の中で，高齢者にかかわる話題も，年金制度や介護問題など，あまり明るいものが多いとは言えない。確

かに，これらは，政策レベルを中心に，しっかりと対策を講じていかなければならない重要な問題ではある。しかし，「寝たきり老人」「一人暮らしの寂しい老人」など，高齢社会の問題として，真っ先に連想されやすい「暗いイメージ」とは逆に，「気力・体力共に十分ありながら，退職後の「第二の人生」の生きがいが定まらず，精神的に悶々としている，身体的には「元気な」高齢者が増えている」ということも見逃してはならない。つまり，身体能力，認知能力には個人差があり，決して，「老人」「高齢者」として，ひとまとめにすることはできないということをしっかりと自覚する必要があるだろう。

10.4．自分の使っている言葉を意識する

介護などが必要な高齢者とともに，心身ともに元気な高齢者の方々も増えていくことが予想されるこれからの「高齢社会」においては，そういった高齢者の方々が，第二，第三の人生をより充実したものにできるような「社会環境」を作っていくことが必要である。

社会制度の改革などは，一朝一夕にできるものではない。しかし，自分の使っている「言葉」や「言葉遣い」を意識してみることなら，明日からでも始められる。

11．おわりに

はじめに触れたような加齢と脳の機能，言語能力との関係など，加齢と諸機能との関係についての研究は，是非とも必要である。これらの結果の中には，一般の予想に違わず，加齢に伴って何がしかの能力が衰えるということを示すものもあるだろう。しかし，こういった研究が必要なのは，むしろ，より若い世代が高齢者と円滑なコミュニケーションをはかり，また必要に応じて「適切な」保護や調節行動を行うための客観的資料を提出することができるからであり，「高齢者の無力さ，弱さ」に関する思い込みを助長するためでは，決してない。

「言葉」の力を意識し，お互いが，「相手が望む言葉」を尋ね合い，交渉しながらコミュニケーションを行うことを心がけるということが，今世紀，ますます求められるようになる。「対人コミュニケーション」の基本だからである。このような対人コミュニケーションの言語問題を考え，分析する一つのアプローチとして，筆者は，現在「ポライトネスの談話理論」を構想中である。口頭発表では，本稿で述べたような現象を，「フェイス侵害度の見積もりのギャップ」，「マイナス・ポライトネス」という概念も含む「ポライトネスの談話理論」（宇佐美，2001b）の観点から分析した解釈などにも触れたい。

【参考文献】

伏見貴夫（1999）「言語能力の加齢変化」『第57回老年学公開講座お年寄りのコミュニケーションを考える』報告書，東京都老人総合研究所，（東京都老人医療センター，東京都多摩老人医療センター），32-57.

Ryan, E. B., Hummert, M. L., & Boich, L. H. (1995) Communication Predicaments of aging: Patronizing behavior toward older adults. Journal of Language and Social Psychology. Vol. 14 Nos. 1-2. 144-166. Sage Publication Inc.

辰巳格（1999）「コミュニケーションに関与する脳機能」『第57回老年学公開講座お年寄りのコミュニケーションを考える』報告書，東京都老人総合研究所，（東京都老人医療センター，東京都多摩老人医療センター），10-31.

宇佐美まゆみ（1999）「高齢者とのコミュニケーション」『第57回老年学公開講座お年寄りのコミュニケーションを考える』報告書，東京都老人総合研究所，（東京都老人医療センター，東京都多摩老人医療センター），58-91.

宇佐美まゆみ（2001a）「21世紀の社会と日本語－ポライトネスのゆくえを中心に－」『言語』（1月号特集「21世紀の日本語」），第30巻第1号，20-28.

宇佐美まゆみ（2001b）「談話のポライトネス－ポライトネスの談話理論構想－」『談話のポライトネス』，第7回国立国語研究所国際シンポジウム第4専門部会報告書，国立国語研究所編．9-58．凡人社.